



審査委員長 伊東 豊雄

コンペティションの応募期間中に東日本大震災が起これ、サスティナビリティという言葉はかつてよりはるかに大きな意味を持つに到った。私達はこれから先どのように生き、また建築を志す者として、どのような建築をつくるべきかが問われている。そんな時期に吉松宏樹さんの提案が最優秀案に選ばれたのはとても良かったと思う。彼の案はこうしたアイデアコンペティションの応募作としては実に素朴で地味である。決して美しいドローイングとは言えないし、表現のセンスも良いようには見えない。しかしガラスのダブルスキンで覆われた小屋に独自のアイデアが盛り込まれた。内側のガラスが引き出しのように随所で引き出され、そこからダブルスキン内の空気をコントロールできるのである。

改良すべき点は多々あるけれども、実現の可能性を秘めた提案である。熱に対してのガラスの弱点を克服しうる可能性という点で評価したい。

優秀案となった高城冬悟さんの提案は実現可能性は低い、テーマをよく読み込んだプロジェクトと言える。汚水を飲料可能にするプロセスを可視化し、しかもランドスケープとして美しい風景に描いて見せた点が魅力的であった。入選のなかでは横川美菜子+藤本健太郎さんのガラスブロックを用いた高速道路の遮音壁の提案、松本幸司さんの立体駐車場を利用した農園の庭園、後藤充裕+引地康之さんの農家の屋根にソーラーパネルとガラス瓦を重ねる提案等に好感を持った。

飽くまでアイデアコンペティションではあるが、それがアイデアのためのアイデアに終るのでなく、今日直ちにつくられる建築や都市につながることのできるアイデアであって欲しいと切に願う。

審査委員 古谷 誠章

ガラスは古くて新しい材料である。14年ぶりにこのコンペの審査に加わったが、また新たに考えたいテーマでもあった。ひとつには「サスティナビリティ」の語が社会に完全に定着したこと、もう一つは、この3月に発生した東日本大震災を抜きには考えられないということがある。提案部門最優秀吉松案は、自然エネルギー住宅を造る好材料としてのガラスに真向から取り組んだ提案で、その姿勢に大いに共感した。惜しむらくは外皮はガラスブロックとすればなおよかったのではないだろうか。優秀高城案は、生命線としての水の浄化に排む心意

気に賛成。入選では地中を活かそうとする高橋案、立体駐車場を転用する松本案に可能性を感じた。高速道路の防音壁の横川+藤本案は現実性のある都市美観上の提案である。選にもれた中に、防潮堤をガラスによって透明化しようとする案がいくつかあった。この震災で高い防潮堤が逆に災いして津波の襲来が見えず被害が拡大した町があった。その意味で視界を確保した防潮堤は、今後真剣に取り組まれねばならない課題ではある。ただ各案のそれが透明なイメージに終始していたのが、少し心残りであった。

作品例部門では最優秀となった「アース・ブリックス」が抜きんでていた。土煉瓦で造る本体構造にガラスの組織感が見事にマッチしている。それとは対照的にハイデザインでX線照射室をつくり上げた「GC Corporate Center」は、特殊なX線遮蔽ガラスとミニマルなサッシュデザインとの組み合わせが秀逸である。入選の中では「ロテル・デュ・ラク」のファイバーを混入したガラスブロックでLED光を分光拡散させようとする試みに惹かれた。やはりガラスは古くて新しい材料だと思う。まだまだ多くの夢を見られそうだ。

審査委員 北 泰幸

東日本大震災にも関わらずというか、だからこそ、建築というジャンルで社会に提案して行こうという精神を常に持ち続けていく方々が、意思表示の一つとして、敢えてこの時期に応募されたことに敬意を表したい。

提案部門では、各案は震災から何がしかの影響を受けているに違いないが、其れを直接的に表現するものと、(意識は勿論しているであろうが)大きくサスティナビリティを捉えるものとがあった。吉松案は、誰でも考え付きそうな案であるが、一歩進めて可変ウォールという概念を取り入れ、新たなガラス建築の可能性を期待させてくれるものであった。高城案は、水浄化過程の見える化を通じて、開発途上地域にコミュニティ空間を生み出したいという夢が感じられた。横川+藤本案は、実現性はともかく高速道路がこのように見れば都市景観も少しは良くなるであろうと思わせられる。神崎案、高橋案は、ともに表現力に優れ、実際にこのように上手くいくかといった懸念を忘れさせてくれる美しいプレゼンテーションであった。

作品部門では、「アースブリックス」が抜き出していた。構造体の土ブロックとガラス部分との対比がプロポーシオン良く設計され、何より建築として美しくプロとして

の力量を感じさせる。「ロテル・デュ・ラク」では2件入選しているが、技術開発面で新しい展開を計ることと、客室にテレビというありきたりな空間を何とかしたいという試みがともに評価される。「尾崎呉服店・尾崎邸」は地方都市のささやかな建物であるが、商店と個人邸を、ガラスブロックの特質をそれぞれ生かして統一感を生み出し、町並み形成への貢献を果たしている。「氷川参道出張所」は、参道景観を守りながら消防隊員のプライバシー空間を作るという課題を、ガラス、ペルーナという素材の美しさを活用することで解決している。

審査委員 三宅 雅博

第18回空間デザイン・コンペティションは、3月初めの告知直後に東日本大震災が発生するという大変な時期に開催されました。日本中が復興に向けた対応に追われ、特に建築業界に携わる方々は大変お忙しい日々であったことと思います。そのような混乱の時期にあって、今回も数多くの応募をいただくことができましたこと、無事に審査を終えられましたことを、ご関係者各位、ならびに応募者の皆様方に深く感謝申し上げます。

【提案部門】最優秀賞の吉松案『Slide wall』は、中間に通気層をもつグリッド状の二重ガラスで壁面、屋根面を構成し、それらの個々の室内側のガラスを引き出すことで外気を採り入れるという、今までに無かった斬新なアイデアを感じられる作品でした。ガラスの透光性と自然の空気循環でエネルギー消費を極力抑え、サスティナブルな空間を実現する、ガラス建材の新商品開発の一つの方向性を示した大変興味深い提案でした。優秀賞の高城案『Glass Wall Filter』は、途上国で疾病原因の大半を占める「汚れた水の摂取」という問題を、自然素材で濾過機能を持たせたガラスブロック壁を広場に設置することで解消するといった、人にも環境にもやさしい作品でした。ガラスの透視性が濾過水の安全を「見える化」する、ガラスの特性を活かした提案でした。

【作品例部門】最優秀賞の「アース・ブリックス」では、「ガラス」の質感が自然素材である土ブロックと意匠的に良くマッチし、機能的にもハイサイドライトとして光を柔らかく採り入れていました。「ガラス」の価値を最大限に引き出した作品でした。優秀賞の「GC Corporate Center」では、一般的には放射線遮蔽用「ガラス窓」として使われるLXを「ガラス壁」として使うことにより、レントゲン室を明るく開放的な空間に変えた、正にLXの使い方を一新した作品でした。